No.9　　２０１５．１２．１３／発行人：大庭　康二

◆ニュースレターおおば◆

平成２７年１２月号

テーマ『里山・里海』

○…新書大賞２０１４第１位の「里山資本主義－日本経済は“安心の原理”で動く」、藻谷浩介、ＮＨＫ広島取材班著。角川書店。それに続く「里海資本論、日本社会は“共生の原理”で動く」。井上恭介、ＮＨＫ「里海」取材班著。角川新書。先行き不安の声ばかり聞こえる中で、将来に希望の持てる著作だ。マネー資本主義の限界を何となく感じていたが、我々が生きていくのに必要なのは水と食料と燃料であることをきちんと認識すれば突破口は開ける。岡山県真庭市やオーストリアの事例を見れば、北海道でも、この地域でも、取り組める切り口は出てくる。更に里山から里海へ。瀬戸内海の再生で注目された「人が手を加えることで海を健康にし豊かにするメカニズム」ＳＡＴＯＵＭＩの概念が、地球の限界を救うモデルだという。先行き不安から希望の持てる２０１６年に繋げるための２冊になった。

○…今年も年の瀬、ニュースレターでは取り上げなかった今年読んだ本を少し紹介したい。自分の好み丸出しで何の参考にもならないが、お許しを。

○…昔から好きだった筒井康隆。学生時代は手当たり次第に挑戦したが、社会人になってからはごくたまにしか手にしなくなった。笑いだけを求めていたわけではないが、笑う感性が自分自身の中で変わって来たのだろう。「世界はゴ冗談」、新潮社刊と、それに続く新潮１０月号「モナドの領域」。最高傑作にして、おそらくは最後の長編、というフレコミ通りに楽しんだ。

○…近年お気に入りが奥田英朗。シリアスなものもいいが、普通の人を普通に描くのがなんとも言えずいい。「我が家のヒミツ」、集英社。「ナオミとカナコ」、幻冬舎。「田舎でロックンロール」、角川書店。それと「延長戦に入りました」、幻冬舎文庫は２００２年に出て大笑いした記憶が有り、書店で新装再版を見つけてまた買って、また大笑い。もう古い話になったのにまだ笑える。スポーツ好きで冗談の通じる人にオススメ。

○…好きな作家と言えば黒川博行も。「国境」が凄く印象に残っているが、昨年、「破門」で直木賞を受賞。受賞第１作「後妻業」を読んでこんな世界もあるんだと思っていたら、すぐ小説通り、そのものの事件が起こって新聞テレビを賑わせ、ビックリした。次の「勁草」、徳間書店、でもオレオレ詐欺の実態に迫っている。

○…警察小説の分野では北海道出身の佐々木譲と今野敏が双璧。今野敏は函館ラ・サール高校の６期後輩。地方の中学校からラ・サールに進んだ体験が感覚的によく分かる。自伝エッセイのハルキ文庫「流行作家は伊達じゃない」にはなぜか同級生の兄と言うことで

僕の同級生、ジャズピアニスト元岡一英が出てきた。初の青春学園ミステリー「寮生、１９７１年、函館。」は正に我が母校を舞台にしている。僕は３年間、下宿生活だったので寮生活は体験していないが、小説には遺愛や白百合など函館の女子高とかも出てきて懐かしさ満載だ。

○…読んだ順番は忘れたが印象に残ったのは、東京プリズンで注目された赤坂真理の「愛と暴力の戦後とその後」、講談社現代新書。「永続敗戦論、戦後日本の核心」で注目された白井聡が笠井潔と討論した「日本劣化論」、ちくま新書。宮本民俗学の代表作と言われる宮本常一「忘れられた日本人」、岩波文庫、などなど。

○・・・年齢と共に身体もあちこちガタが来てるが、何とか来年もニュースレターをお届けしたい。どうぞ良いお年を。